

## 『それから』における「自然」について

加藤 富一

### 一

漱石は『三四郎』を書き終えて約半年後、『それから』を、明治四十年六月から十月まで朝日新聞に連載した。『三四郎』では、「ヒロインを通じて問われる個の自立と我執」が問題になっており、「さらに『それから』に発展し、愛をめぐる人間心理の明暗を執拗に追求する」といわれる。この「心理の明暗」を「自然」という語を中心にして探求したい。

### 二

彼はしばらくして、「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云った。斯う云ひ得た時、彼は年頃がない安慰を総身に覚えた。何故もつと早く帰る事が出来なかつたのかと思つた。始から何故自然に抵抗したのかと思つた。

代助は、平岡から三千代を取り返した。代助にとって三千代は、父母未生以前の恋人であつた。この恋人をかつては平岡に譲つた。しかしそれは、自己を否定することになると考えるようになった。そこで「今日始めて自然の昔」に帰ろうとするのである。以前は「自然に抵

抗した」。その抵抗をやめたとき、代助は「年頃がない安慰」を覚える。

ところで、ここにいう「自然」とは何か。滝沢克己氏がそれを次のようにいつている。

結婚という結びつきは、一面人間のすることでありながら、他面、人間の意志からまつたく独立な「人間の自然」に、人間がそれに従属することによつてのみ人間でありうる「自然の意志」に、その真実の起源をもつている。

愛は結婚という形をとる。そしてそれは、「自然」にその「起源」をもつというのである。それは、「人間の意志からまつたく独立」のものである、と滝沢氏は説く。代助の「何故」に対する解答が、ここにある。代助の「意志」から離れたところに愛が存在していたのである。だから代助は、三千代を平岡に譲つた。

さらに滝沢氏は、次のようにもいう。

すでに『それから』のなかにその模型が示されたように、漱石の作品においても、現実の「自然の人」は、けつしてたんに人間

の内側から成るのではなく、逆に人間のあらゆる意志に先立って、「大きな自然」においてすでに決定せられている「人間の自然」にもとづいてのみ歴史的な現実となるものである。<sup>5)</sup>

「自然」は代助の意志を越えたものである。代助が三千代と結ばれるか否かは、「大きな自然」がきめる。いな、すでにきまっていたのである。代助はそれを知らず、三千代から離れた。その離れた理由は、平岡に対する友情であった。その時の気持ちを代助は次のように述べる。

「其時の僕は、今の僕でなかった。君から話を聞いた時、僕の未来を犠牲にしても、君の望みを叶へるのが、友達の本分だと思つた。それが悪かつた。今位頭が熟してゐれば、まだ考へ様があつたのだが、惜しい事に若かつたものだから、余りに自然を軽蔑し過ぎた」

三千代を平岡に譲つたとき、代助は「自然」からはるかに離れていた。自分の意志によって行動していたからである。そして「すでに決定せられている」方向に反して動いた。それは「友達の本分」を守る方向であった。しかしそれは、「若かつた」ころの未熟な考え方であった。「自然」が決定していることに忠実ではなかつた。

### 三

この「自然」について、武者小路実篤は「白樺」創刊号の「『それから』について」<sup>17)</sup>の中で、次のように述べる。

自然の力を頭はず方法として恋が書かれてゐる。漱石氏は恋と情欲の区別を明かに知つてをられる。代助をして平岡の恋を恋でないと言はしてゐる。細君が病氣になつたために遊びたくなるやうな恋はないと代助は思つてゐる。平岡の恋は自然派の言ふ恋である。情欲八分の恋である。代助の三千代に対する恋は八分愛である。

「自然」は真正の「愛」という形でその姿を現す。ところが、平岡のは情欲の恋であつたと実篤は指摘する。そのため、代助の友情はその意味を失つた。平岡が「愛」に生きてこそ代助の「決定」は意味があつた。それが情欲によつて無意味となつたとき、代助は「自然」の指示する道を改めて選ばなければならぬと悟つたのである。

「自然派」は、明治末年から顕著になつた自然主義の文学運動である。この主義には、人間を情欲の奴隷と見る思想があり、実篤はそれに反対して平岡の恋を「情欲八分」の恋とする。「自然派」と称しながら、その名に値しないものと実篤は判断する。平岡は三千代が病氣になると、情欲のはけ口を女遊びに求めた。これはいわゆる「自然派」の「自然」であり、「大きな自然」と似て非なるものと考えるのである。

大井征氏も次のように述べている。

漱石は『煤煙』の恋愛のような不自然なパッションを描こうとしたのではなかつた。代助はあくまで理知を失つてはいない。むしろ理知を押しすすめて行つた結果が「自然本能の発動」となつたのである。倫理上からすれば不道徳とされる代助の恋愛も、代助の理知からすれば、それが真に「神聖の愛」であつたのである。<sup>18)</sup>

「不自然なパッション」は「情欲」である。情欲を「不自然な」と見ている。そして「自然」は「理知」と見る。代助は「理知」によって、三千代を平岡に譲ったと見るのである。代助の場合、「理知」は「友情」という形をとった。

ただ、「理知」は「自然」ではない。「大きな自然」に比べると、卑小なものである。そこで「理知を押しすすめ」た結果、「自然本能の発動」となったとあるが、「理知」と「自然」との間には越えられない障壁がある。「大きな自然」が「神聖の愛」を要求するのに対し、「理知」は平岡の「情欲」を予断することはできなかつた。「理知」の小なる所以である。

#### 四

大井氏は代助の恋愛を「倫理上からすれば不道德」と指摘する。吉田六郎氏も次のように述べる。

『それから』の代助は愛という自然の命令に背いて、三千代を友人平岡に与えたが故に、のちに手痛い刑罰を蒙らざるを得ないのである。

「不道德」に課される「刑罰」が、ここで問題になる。代助は、卑小な「理知」に従った。しかし、卑小なる人間であるがゆえに、その見通しは誤っていた。そこで軌道を修正した。代助にとって、この道こそ「自然」なのである。しかし、人の世のきまりは、これを「不道德」とする。いったん定めた軌道の修正を認めない。社会が混乱する

からである。そこで「刑罰」を課する。

この点について武者小路実篤は、前掲『それから』についての中で、次のように述べている。

終りに自分は漱石氏は何時までも今のままに、社会に対して絶望的な考へをもつておられるか、或は社会と人間の自然性の間にある調和を見出されるかを見たいと思ふ。自分は後者になられるだらうと思つてゐる。さうしてその時は自然を社会に調和させようとされず、社会を自然に調和させようとされるだらうと思ふ。さうしてその時、漱石氏は国民の教育者となられると思ふ。

「社会」に対する「絶望的な考へ」は、社会が「自然」に生きた人間に「刑罰」を課するのを認める考え方である。『それから』には、「社会に背く者は滅亡するといふ考へが書かれてゐる」。これを実篤は「絶望的な考へ」と書く。「自然性」に生きる人間を「滅亡」させる「刑罰」を是認している『それから』に対し、「社会を自然に調和させる」方向を考えてもらいたい、と漱石に希望しているのである。

しかし漱石は、次作『門』において、「不道德」な結びつきで暮らす宗助とお米が、世の「刑罰」の咎の下で生きつづける姿を描く。実篤のように考える方向を模索するのが『門』なのである。世のしがらみから解脱しようともがくのが人間であり、人間が彼岸をめざして歩きつづける姿を描くのが作家である、ということを示しているということになる。

#### 五

次に「友情」の心理が問題になる。代助は、友人平岡に三千代を譲

った。そして、「不道德」な行為に走らざるをえなくなった。武者小路実篤は、その作品『友情』において、大宮を不倫から救う。大宮は次のようにいう。

自分はあるものにあやまりたい。そして許しをこひたい。一方自分は自分を正当だと思ひ、やむを得ないと思ふ。そして、自分のとつた態度を必然のやうな気もする。だが何かにあやまりたい。自分は君に許しを請はうとは思はない。それはあまりに虫がいい。君はとるやうにとつてくれればいい。君は君らしくこの事実をとつてくれるだらう。自分の方は勿論君を尊敬し君にたいして友情を失ひはしない。しかしそれは反つて君を侮辱することになるとを恐れる。<sup>12</sup>

大宮は、野島が恋している杉子を横取りにすることができなかった。自分を信じ、たよっている野島を売ることではできなかった。それで大宮は杉子に、「こびず、冷淡にしてゐた」<sup>13</sup>。ところが大宮は、だんだん杉子にひかれるようになる。そこで、その心をたち切るためにヨーロッパに行く。しかし、杉子は愛のメッセージを送りつづける。大宮は「自然」にかえる。そしてそれは、代助とは異なる時点であった。杉子はまだ野島と結婚していない。武者小路実篤は、「社会と人間の自然性」<sup>14</sup>とを調和させようとして、この方法を案出した。これが「友情」であり、しかも「自然」に帰つたやり方であるとするのである。しかし、愛と友情との両立は難しい。古来、複数の男が一人の女を争つて、男同士が血闘したり、女が水に身を投げ、男たちも後を追うといった悲劇が多く伝えられている。『友情』のような例は稀である。漱石は、代助の友情をそのようには描けなかつた。三千代を平岡

と結婚させてから、その後「自然」に帰る。そこに、「明」から「暗」への苦闘が現出する。

もつとも、実篤も、一方的に大宮に凱歌をあげさせてはいない。「何かにあやまりたい」といわせている。「何か」は、おそらく「自然」であろう。それまで見向きもしなかつた「自然」に対して、自分の非礼をわびたいのである。野島に対してはわびたいと言っていない。「あまりに虫がいい」と思うからである。ただ野島に対して、「友情を失ひはしない」という。それをも「虫がいい」と野島に思われるかもしれない。しかし、それは甘んじて受けるよりしかたがない、と思つていようであらう。

## 六

漱石は『こゝろ』で、「友情」を裏切る男を描く。先生が友人のKをおとしいれる。先生は自己の愛のために、親友を出しぬく。次のように描かれている。

私は私にも最後の決断が必要だといふ声を心の耳で聞きました。私はすぐ其声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。<sup>14</sup>

Kがお嬢さんを愛していることを先生に告白すると、先生は愕然とする。「最後の決断」をしなければ、Kにお嬢さんを奪われるに違いない。先生は迅速にことを運ぶ。仮病をつかつて大学を欠席し、だれもいない時に、奥さんに『御嬢さんを私に下さい』という。奥さんは『宜うござんす、差し上げませう』といつてくれる。

ところが、Kは自殺する。お嬢さんを獲得した先生は、心の重荷を負って生きていかねばならぬ。「どうとう自殺する決心」をする。代助が三千代を平岡に譲ったことは、「自然」に反することであった。そこで先生は、Kにお嬢さんを譲らなかつた。ところがKは自殺した。先生は「自然」の命ずるままに行動した、と考えられる。にもかかわらず、事態は「調和」をもたらさなかつた。

武者小路実篤は、「社会を自然に調和させようとされる」ことを漱石に希望した。漱石は、その望みの方向で『こゝろ』を書こうとした。それは、先生にはじめから「自然」の道を歩ませたことで判明する。しかし、「社会」は「自然」と調和しなかつた。そこで漱石は、「社会」に生きるKを殺し、先生自身をも死に追いやらざるを得なかつた。

ここで、「自然」とは何かを問ひなす必要がおこる。それは、滝沢氏のいう「大きな自然」でなければならぬ。単なる「自然」ではないようである。「人間の内側から成る」のは、「大きな自然」ではなかつた。したがって、先生の「自然」と考えられたものは、実は「内側」のものに過ぎず、「社会」と調和できるものではなかつたのである。

「内側」のものが頼みにならぬことを、漱石はその書簡で次のように述べている。

天下に己れ以外のものを信頼するより果敢なきはあらず。而も己れ程頼みにならぬものはない。どうするのがよいか。森田君此問題を考へたことがありますか。<sup>15)</sup>

人間は自己を頼るしかない。自己の「自然」を頼るしかない。しかし、「己れ程頼みにならぬものはない」と漱石はいう。「自然」は「大

きな自然」ではなく、自己の「内側」から出たものに過ぎないから、「頼みにならぬ」のである。これに頼ると「社会」と摩擦を起こし、はては自己を破滅に追いこむしかないのである。森田草平は、「自然なパッション」で動いた（『煤煙』）。漱石は、「社会」から抹殺されようとする草平に、厳しい忠告を与えているのである。

## 七

「内側」の「自然」は、「明」であるかに見える。しかしそれは、「大きな自然」ではない。それは、「暗」にすぎない。「明」と考えられるのは短い期間に過ぎず、しかも、単なる肉欲の発動に過ぎなかつたりするのである。

漱石は、『それから』や『こゝろ』において、「己れ」の「自然」が頼みにならぬことを知り、以後の作品において、その実態や「社会」との調和の道を模索しつづけるのである。

## 文 献

- (1) 三好行雄「夏目漱石の人と作品」(『鑑賞日本現代文学』⑤夏目漱石)角川書店、昭和五十九年
- (2) 岩波書店新書版『漱石全集』第八卷、十四。漢字は新字体に改めた。
- (3) 『正法眼蔵』第二十五、谿声山色。
- (4) 滝沢克己「漱石文学における結婚と人生」(『滝沢克己著作集4』一四二頁。法蔵館、昭和四十八年)
- (5) 同前一八一頁。
- (6) 前掲新書版『漱石全集』第八卷、十六。二四四頁。
- (7) 角川文庫『若き日の思索』昭和四十二年。
- (8) 新潮文庫『それから』解説。昭和六十年。
- (9) 吉田六郎『作家以前の漱石』七十一頁。頸草書房、昭和五十四年。
- (10) 前掲『若き目の思索』四〇頁。

- (11) 同前三六頁。  
(12) 新潮社『武者小路実篤全集』第五卷。下編十一。昭和三十一年。  
(13) 同前下編七。  
(14) 前掲新書版『漱石全集』第十二卷。下四十四。  
(15) 同前第二十八卷。明治三十九年二月十三日付、森田草平あて。